

# 道南史の女性たち

## ① 井上幸子（1913～86年）

音楽へ情熱積極的に活動

### 「函館音楽協会」を設立

幸子の父佐々木文治は鹿部町の漁師に生まれ、東大法学部を出て函館に戻り、弁護士となった。母ハツは函館の裕福な回船問屋の娘で、東京の跡見女学校に通った。

跡見女学校は皇族や華族ら上流階級の女子が通う「お嬢様学校」で、幸子も親元を離れて入学した。

幸子は回顧録「三十余年の星霜を生きて」を残しており、それによると跡見から実践女子専門学校（現実践女子大）に移り、さらに音楽教師の道

に進もうと決意し、武蔵野音楽学校（現武蔵野音楽大）師範に入り、ピアノと音楽を修めた。

音楽への情熱は高かったようで、函館に戻ってからはピアノの指導者となったほか、1936年（昭和11年）に仲間と共に「函館音楽協会」を設立し、活発に演奏活動を行

った。棒二森屋女声合唱団の指導にもあたった。39年（同14年）に函館大妻女子高等技芸学校（現函館大妻高）の音楽講師となった。



41年（同16年）に函館市立中学校（現函館高）の国語教師の井上一と結婚。函館大妻女子高等技芸学校は3年間で辞め、その後は勤めていないようだ。

共産党員である一との結婚は、運命を大きく変えた。一は大学時代からプロレタリア文学や演劇、エスペラント、消費組合などにかかわっていた。官憲にもマークされ、幸子の職場にも憲兵が校長を訪ね、様子を探られた。

戦争激化に伴い、一の身边は官憲の目が厳しくなり、一の留守中に交番の巡査がやって来て「（一の）本籍地の岐阜の警察から調査が回ってきた。今何をしているのか」と聞かれた。

戦後も楽ではなく、共産党員やその同調者らが職を解雇させられた「レッドパージ」で一は職を失う。2人の子供を抱えた幸子はピアノを教える家計を支えた。自著に「この頃がいちばん辛い時期だった」と書いてある。思想信条は一の影響を強く受けたとみられ、幸子も49年に日本共産党に入党している。一はその後、函館市議として活躍した。

幸子は音楽活動を続け、52年には「函館トロイカ合唱団」を設立し指導。81年に函館電話局出身者が「函館こぶし合唱団」をつくり、指導者に迎えられる。

肝臓がんを患い、死去。73歳だった。幸子が設立にかかわった「函館音楽協会」は現在も存在している。

（紺野哲也・元函館市市史編纂室長）

明治、大正、昭和と時代の波にほんろうされながらも、函館をはじめ道南の歴史に名を残した女性たち。生い立ちや人となり、功績などを紹介します。

（火曜日）に随時掲載します

こんの・てつや 1946年上川管内土別町（現土別市）生まれ。北大文学部史学科卒。71年函館市役所入り。76年から市史編纂さん事務局に勤め、91年、2007年市史編さん室室長。14年から図書館歴史講座を主宰する。

#### 【これからの日程】

◎道南のおもいきり音楽会 未定

◎北海道のうたごえ祭典 in 札幌

9月7日（土）合唱発表会・特別音楽会、8日（日）大音楽会

◎日本のうたごえ祭典 in 京都

2019年11月29日（金）～12月1日（日）ロームシアター京都